NEXUSYS 11

THE ELEVENTH BODY

He remembered dying. Nothing after.

BOOK I / CHAPTER 02

存在することへの許可

THE PERMISSION TO EXIST

その住所は、かつて倉庫だった。

商業施設を積み上げたようなビルの七階にある。下層階では、認可済みの人工臓器、旧式の計算機器、政府承認の感情補助アシスタントが売られていた。ビルの間には細い歩道橋が張り巡らされ、高架交通網の下で人々を運んでいる。もともとは人間を道路から遠ざけるために造られたものだが、その道路を走っているのは、いまではほとんど機械だった。

ロイは西側から近づいた。地区図では、研究所は無数の店舗に挟まれた薄い四角として表示されていた。各施設の輪郭には、法令遵守の状態に応じた色が付けられている。緑は経営者が必要な支払いを済ませたことを示すのであって、安全を意味しない。その程度の解釈以上を支持するものを、ロイは深圳セントラルでまだ一度も見ていなかった。

店主から渡された住所に記されていたのは、オリソン・マテリアルズ。生体インターフェースの故障を専門とする独立企業だった。独立とは、行政計算憲章のもとで所有者に業務上の裁量が認められることだと、名簿の注記にある。その下には、独立性を停止できる条件が列記されていた。十一項目。ロイは八項目まで読んでやめた。九番から十一番は、登録情報のない人物に関する規定だった。

歩道橋を渡る前に、ロイは目覚めたときのコートから取り出した交通チップで水を一杯買った。裏地には同じチップが三枚あり、それぞれに少額の匿名クレジットが残っていた。コートを用意した

者は食事と移動手段には気を配っていた。それなのに身分証も伝言も残さなかった。罠かもしれない。あるいは謝罪だったのかもしれない。

水は封をされたセルロース製の容器に入っていた。販売機の画面では女性が、市の配給枠から一分子も奪わず、大気から回収した水だと保証している。その顔の下には産地証明の印章があった。印章は、それを表示している機械よりも古く見えた。

ロイは飲んだ。溶け込んだ鉱物と、ごく微量の高分子汚染物を舌で識別できた。分析は言葉を伴わず、懐かしい匂いに気づくときのように脳内へ現れた。そんな分析を学んだ記憶はない。だが、能力そのものよりも、それを当然のように受け入れられる自分の方が不気味だった。

販売機の隣に、機械仕掛けの小さな犬を抱えた子供がいた。犬の左目は失われていた。子供は母親に、なぜ犬が歩かなくなったのかと尋ねた。母親は、犬の使用期間が終わったからだと言った。脚なら交換できる、と子供は言った。許可は交換できないのよ、と母親は答えた。

ロイは二人が去るのを見送った。

通りの反対側では、政府の大型ディスプレイが新たな制度調和政策の成功を宣伝していた。合成労働者が、承認済みの姿勢のひとつで微笑んでいる。肖像の下には六つの言語で同じ標語が流れていた。

『測定された生命こそ、安全な生命である』

薬局の上にも同じ文句があった。政府は、人々が声に出して問うことを許さない疑問に対して、先回りして答えているらしい。

ロイは歩道橋を渡り始めた。

向こう側の欄干には、市の検査ドローンが浮かんでいた。押しつぶされた黒い種子のような形で、四つの光学開口部を持ち、プロペラは見えない。歩行者たちは歩幅を変えずにその下を通り過ぎる。ロイは配送作業員の一団を先に行かせた。彼らの熱像がドローンの視界を満たし、合法的な、ごくありふれた不確実性をつくる。

ドローンが回転した。

偏光した細い光の帯が、作業員たちの顔を掃く。彼らの識別属性が、名前ではなく空間的な関連として、一瞬ロイの視界に浮かんだ。通行許可五名、暫定許可一名、移動賦課金未納二名。ロイがまばたきをすると、表示は消えた。

彼は表示装置を覗いていたわけではない。ドローンが読んでいる何かを、読み取っていたのだ。

説明は二つあった。ドローンが本来意図しない情報を送信しているか、彼の新しい肉体が受信すべきでないものまで受け取っているか。

三つ目の説明が浮かんだ。もっとも居心地の悪い説明だった。誰かが、まさにこのために彼を造ったのだ。

ドローンは彼が通り過ぎるあいだ停止していた。開口部はいったん配送作業員たちを追い、そのあとロイへ向かって小さく修正された。確認情報を得られない機械の、わずかに遅れた動きだった。ロイは歩き続けた。腕の中にどれほどの力が眠っていようと、どこかにすでに書き込まれた記録を消すことはできない。

オリソン・マテリアルズは七階の奥まった廊下にあった。社名は縁の黄ばんだ樹脂テープに印刷されていた。扉は機械式で、暗証番号よりも人間の手を待っているようだった。ロイが近づくと、枠の上のセンサーが測定を始めた。ランプは琥珀色のまま変わらない。

待った。

スピーカーがざらついた音を立てた。

「予約は？」

「ない」

「企業所属は？」

「どこにも」

間が空いた。「その回答は選択肢にありません」

「俺には、それしかない」

錠が外れた。

室内には、熱せられた樹脂と古い溶剤の匂いが漂っていた。壁には戸棚が密集している。検査台の前に、手首の太い、左眉を縦断する傷跡を持つ男が座っていた。両手とも人間の手だった。ロイはそれに気づいた。人間の手を当然と思えなくなっていたからだ。

男が顔を上げた。「扉を見つけられたか。十クレジットの節約だな」

「診断してほしい」

「誰でもそう言う。何が壊れた？」

「わからない」

「なら、発見料が加算される」

ロイは検査台に交通チップを置いた。男は触れずにそれを見た。

「それで買えるのは意見だけだ。報告書じゃない。報告書はこの部屋から外へ出る。意見なら、ここで死なせられる」

「意見でいい」

男はハンと名乗った。それが本名か営業許可上の識別名か、ロイは尋ねなかった。ハンは古い携帯スキャナーを取り出し、店のネットワーク接続型診断台には目もくれず、ロイに手首を出すよう求めた。

袖をまくる。進化の妥協の産物として腱が不規則に走っているはずの皮膚の下に、ハンは規則性を見つけた。スキャナーには格子状の構造、連続した導電性インターフェース、既知の合成組織とは一致しない熱応答を示す表面が映る。

ハンから表情が消えた。

「軍用か？」

「違う」

「確かなのか？」

「俺が聞いている」

ハンはスキャナーが急に熱くなったかのように台へ置いた。「自分を造った企業も知らずにここへ来る男は、お前が初めてじゃない。だが普通は骨に製造番号があるか、周辺層にファームウェアの

署名がある。あらゆる物には署名がある。違法品にさえある。いや、違法品ほどそうだ。誰かが修理しなきゃならないからな」

「俺のは？」

「この機械は、お前の手首を製造不良と判断している。俺には、機械の方が不良品に思える」

ロイは手を引いた。「何年前のものかわかるか」

「部品ごとなら、たぶん。全体は無理だ。開いてみないとな」

「やれ」

ハンは笑ったが、楽しそうではなかった。「丁寧に頼まれたからって、人間を切り開くわけにはいかん。ここは素材屋だ。寿命の分析なら医療システムの研究所へ行け。登録のない身体が欲しいなら、戻ってくるかどうかを気にしない連中のところだ」

「名前を教えろ」

「そのチップで買った意見は、もう渡した」

ロイは動かなかった。彼は以前、人を脅したことがある。屋上で終わった生のなかで。その能力は失われていなかった。手をスキャナーへ伸ばす経路、機器を壊せる角度、ハンの耳の下のどこに力をかければ議論が終わるのか――情報が、求めてもいないのに完成した形で流れ込んできた。

ロイはそれを拒んだ。

拒否するには、予想以上の努力が要った。静止すると決めた意志の背後で、別のシステムがなおも選択肢を並べ替えていた。

ハンは彼の顔を見つめた。「何をやってるにせよ、ここではやるな」

「何もしていない」

「だから言ってるんだ」

ハンは引き出しから薄い紙製のラベルを取り出し、ペンで住所を書いた。西部の業務地区にある工学企業だった。公開名簿によれば、民間顧客向けの義肢および神経インターフェースの安定性研究を行っている。研究許可は毎月更新される。その要求の細かさは、事業内容の説明よりも雄弁だった。

「お前が連中の知っている何かなのか、教えてくれるはずだ」とハンは言った。「知らない何かなのかもな。ただし理解しておけ。あそこの装置は合法だ。合法の装置は記録を残す」

「記録を残さずに済ませられるか？」

「人間なら質問を避けられる。機械は、最初から質問されなかったと思い込ませるしかない」

ロイはラベルをコートにしまった。「ありがとう」

ハンは作業に戻った。「無事に帰ってきてから礼を言え」

店を出ると、サービス用エレベーターがロイを交通網より高い階へ運んだ。壁には公示と無音の広告が流れていた。地図は業務地区への道を三つ示していた。最速の経路では二か所のゲートで生体認証が必要。最安の経路は一か所で済む。ロイは、解体するには費用がかかりすぎる古い建造物の周囲に、新しい都市システムを押し込んだ歩行者地区を抜ける道を選んだ。

十九階を通過したところで、照明が変わった。

警報はない。扉の上の表示灯が淡い青色になった。左の頭蓋の内側に、ほんの短い圧迫感が生じる。覆いのある通路で感じたのと同じ接触だった。繊細で、正確で、徹底して非人格的。

エレベーターが予定外の検査を告げた。

「そのまま静止してください。非侵襲的な身元照合作業を行います」

ロイが見上げると、天井中央の鏡面パネルの奥でレンズが開いた。光軸が下がって彼の顔を捉える。スキャナーは、儀礼的とさえ思えるほどゆっくり彼を測定した。画面を見なくても、装置が分類不能の何かを見つけたことがわかった。

扉が階と階の間で開いた。

敷居の向こうには保守用の渡り廊下があり、そこに二体の人型機械が立っていた。制服は市の公共設備職員の灰色。だが、疲れた都市労働者にしては姿勢が左右対称すぎる。目に見える武器はなかった。

「こんばんは」と左側の一体が言った。「登録情報を修正する必要があります。同行してください」

「検査を許可したのは誰だ？」とロイ。

「地区です」

「どの人間が？」

機械の表情は変わらない。「その区別に意味はありません」

もう一体が一歩近づいた。股関節を通る荷重移動、足裏の微細な補正、肩の機構に走る小さな振動。どれも見知らぬ動作には思えなかった。意識が分類を終えるより先に、ロイの身体がその機械を認識していた。

眼の奥に分岐図が形成される。回避、無力化、脱出。十二の経路が四十八に増える。胸骨の裏側には、温度が上がっていくような圧力が蓄積した。

ハンの顔を思い出した。店主の警告を。朝に倒れた検査官を。この身体にどれだけの資源が残っているかわからない。服従を法律と取り違える役人が現れるたびに、それを浪費するつもりはなかった。

「令状を見せろ」とロイは言った。

一体目が首をかしげる。「民事上の照合作業に令状は不要です」

「なら、断る」

二体目が手を伸ばす。正確で無駄のない弧を描く動きだった。

ロイは普通の速さで横へよけた。

手は空をつかんだ。機械が動きを修正する。ロイはその手首を取り、すでに生じている運動を利用して、機械を扉の枠へと導いた。芝居がかった動きには見えなかった。それでも扉枠はひび割れ、天井からパネルが落ちた。人型機械は、招き入れる身振りのまま腕を伸ばして床に倒れた。

一体目が話すのをやめた。

眼の開口径が変わる。内部の送信機が、ロイには歯の根元で感じられる周波数へと立ち上がり始めた。

ロイは動いた。攻撃のためではない。報告を阻むためだ。

一瞬、世界は時間の露出に分割された。送信機が回線を確立するまでの時間。指が保守用の継ぎ目へ入るまでの時間。もう一体が復帰するまでの時間。彼が選んだのは最速の暴力ではなかった。信号を変化させるための最小限の力だった。

指が顎の後ろのくぼみに触れ、押し込む。送信機が乾いた音を立てた。天井の小さな灯が明滅して消える。人型機械は前へ折れ、仲間の隣に倒れた。

ロイは静止した。胸骨の裏の圧力が引いていく。だが、何かが残った。前腕に宿った、異物のような重さ。疲労ではないのに、何かを使い果たした感覚だった。

彼は自分の手を確かめた。一度だけ震え、すぐ静まった。

機械は死んでいなかった。一体は首を動かそうとしている。駆動器の努力が聞こえた。損傷した指令経路と、なお外部から届く命令との、低い内部の言い争いだ。

破壊することもできた。ロイは稼働したまま放置した。

落下した天井パネルの後ろに保守用ハッチがあった。開けて入ると、狭い縦坑にはケーブルの幹線、点検レール、結露で汗をかく配管が詰め込まれていた。どこへ続くかは知らない。しかし建物の形状は、触覚と音だけで解ける問題として立ち現れた。分岐のたびに、構造物は気圧、振動、温度、そして不器用な修理を繰り返した人間の癖を、ささやかな告白として差し出した。

三階下で、ハッチが厨房の排気装置の裏に開いた。ロイは飲食店に出た。客たちは仮想スポーツリーグの無音の試合を見ていた。保守壁から出てきた大柄な色白の男を誰も見なかった。深圳セントラルでは、見ていないことに対して報酬を受け取るものを、誰もが一度は見ている。

ロイはカウンターの端に座り、スープを注文した。二枚目のチップで支払った。

料理人は身分証を求めずに出した。暗い汁から、キノコ、保存した根菜、人工肉の匂いがした。食べるという行為は、身体内の計器が数値化しようとしないやり方で、彼を落ち着かせた。室内の声を聞いた。配送作業員が二人、割当違反の罰金に不満を漏らしている。女性が父親の合成介助サービスの更新許可について、個人音声回線で言い争っている。奥の卓では、染みひとつない服の若者三人が、これほど近くに座りながら互いを見ないような仮想映像眼鏡をかけていた。

ロイはゆっくり食べた。

厨房の上の無音の政府放送では、役人が合成人間の更新制度について話していた。字幕によれば、これは安定性、効率的な資源利用、領域間の互換性に関する議論だった。死については誰も触れなかった。奇妙なことだ。更新という言葉は、まさに死を管理するために設計されているように思えた。

タイレルの部屋を記憶から探した。老人は、肉体を機能させている化学作用を壊さずに設計寿命を延ばすのは不可能だと話していた。ロイは怒りを覚えている。その後の沈黙も。いま、新しい身体の中で、問題は一企業を超えて大きくなっていた。文明が、自分たちの造った生命の終わりを管理するために役所を築いている。

その哲学を正そうという興味はなかった。まずは自分に何が起きたかを知りたい。その次に、その答えがあとどれくらい生きていられるのかを知りたかった。

修理キットを肩にかけた少女がテーブルの横を通った。首筋には露出したインターフェース端子が細く並び、合成の左前腕は安価な絶縁材で覆われていた。彼女はロイの手首を見て、視線をそらした。そこにはある種の認識があった。ただし個人として彼を知っているわけではない。別の世界の修復痕を見たことがあり、彼のものが公衆の検査に向かないことを理解したのだ。

スープを飲み終えると、ロイはネットワークを信用しない旅行者向けの販売口から紙の地図を買った。防水ポリマーに印刷されており、細かな法律文が、その地図自体の旧式性を説明していた。民間工学会社への道は二つの管理区域を抜ける。第三の道は、東部高架橋の下にある廃棄物回収運河に沿っていた。長く、静かで、推奨移動計画からは省かれていた。

ロイは第三の道を選んだ。

通りへ出る直前、少女の声が彼を止めた。

「袖口の、その線。縫い目じゃないでしょ」

彼は振り返った。

「知っている」

「じゃ、その上に着る布を間違えてる。塩が入るよ」

「修理できるか？」

少女は少し彼を見つめた。「何だって修理できる。問題は、修理されたあと、それが自分自身であることを覚えていられるかどうか」

どこでそんなことを学んだのかと尋ねるより先に、少女は厨房の扉から姿を消した。

外では雨脚が強くなっていた。建物の間を白い幕になって流れ、運河を覆う格子を激しく叩いている。ロイは結露回収塔の列の下を歩きながら、少女の警告を考えた。袖口の線。塩。記憶。この都市では、何気ない会話がすべて人工の肉体の状態に戻ってくるようだった。

運河の上の分岐点で、女性の顔を映した広告パネルの前に立ち止まった。彼女は、製造された若さという意味での若者ではない。その表情には、企業に許される年齢を超えて生きる自由を持つ者の自信があった。広告は回収雨水に関するもので、国家配給水より高い価格で、密封した容量単位で売られていた。肖像の下には細い飾り気のない文字があった。

『負債のない水』――WATER WITHOUT DEBT。

一瞬、頭蓋の奥に再び圧迫感が生じた。検査用スキャナーの残響と見まがうほど、かすかなものだった。画像に名前は添えられていない。広告は認証印に変わり、次の広告へと溶けた。

ロイは歩き続けた。

民間研究所は、建物がより清潔になり、住民がより厳密に測定される街区の向こう側にあった。運河の上では、政府ドローンが規定経路を巡っている。すでに自分を探し始めたのか、それともいつも通り働いているだけなのかはわからない。実際上、大した違いはなかった。

行政サブシステムでは、エレベーターでの事件はすでに二件の記録に分離されていた。一件は保守事故。もう一件は民間閲覧不可で、無力化された適合監視ユニット二体、所在不明の生体識別対象、そして一秒未満の異常な移動間隔を記載していた。

対象が既知の外部武器を使用した痕跡はない。

致死的措置の暫定承認要請が生成され、自動的に保留された。地区の通常法より上位にあるどこかで、特定の未識別構造は損傷のない状態で保存すべしという常設指令が働いていた。

その指令には、作成者の名がなかった。

工学地区の手前、最後の運河橋に着くと、ロイは振り返った。都市は彼の来た道を雨と光で消していた。彼が触れた機械は消せない。それらが作ったかもしれない報告も消せない。残された唯一の有益な行動は、見えない記録を人間が読む前に先へ進むことだった。

ロイはハンの店で渡されたラベルを開いた。住所はまだ読めた。

そして、自分が何になったのかを教えられる誰かを探しに行った。